

巻頭言

びまん性肝疾患の診断の重要性とこれから

寺井 崇二*

近年の超音波医学の発展は目覚ましく、非侵襲的に肝実質の性状を(半)定量化して類推することが可能となった。脂肪性肝疾患の有病率増加が叫ばれる昨今、肝生検を回避して外来レベルで肝硬度測定や脂肪化定量を行えることの意義は大きい。これらの測定法が保険収載され始めていることから、肝疾患診療における重要性をおわかりいただけることと思う。一方で、新技術の浸透とともに混乱を招きやすい状況となっていることも事実である。同じ肝硬度測定であっても、Transient Elastography (TE)、Real-time Tissue Elastography (RTE)、Shear Wave Elastography (SWE) は異なる原理を利用した測定方法であり、それぞれの特徴を理解して実施することが望まれる。肝硬度は純粋に線維化だけを反映した数値ではないことが知られているが、Dispersion Imaging はこれを解決するヒントとなるかもしれない。過大評価の原因となる高度炎症やうっ血の程度を定量化しようという新技術であり、エビデンスが蓄積されつつある。脂肪化定量に関しても、超音波の減衰を評価するという点では共通しているが、メーカーごとに呼称が異なる。

本特集では、線維化・脂肪化の B モード所見に始まり、前述の非侵襲的診断法をご高名な先生方から解説していただいている。本特集は、初学者の先生には超音波検査についての最新知識の習得に、肝臓専門医の先生には各検査の現況把握や用語の整理などに役立てていただけるものと考えている。

また、MRI による肝硬度・脂肪化診断についても解説していただいている。超音波診断に比べ診断能が高いことが報告されており、肝腫瘍のスクリーニングという点でも死角の発生しない検査法である。実施可能施設と症例数が限られてしまうという課題はあるが、優れた非侵襲的診断法であることに疑いない。今後、診断能と throughput を加味しつつ、超音波検査、線維化スコアリング、血清線

Shuji Teraï

*新潟大学大学院医歯学総合研究科消化器内科学分野 (〒 951-8510 新潟市中央区旭町通 1-757)

維化マーカーとのすみ分けが確立していくものと予想される。

最後に、肝線維化は予後や肝発癌に関連するため肝臓専門医が最も重要視している病態である。肝生検は採取できたごく小さな組織のなかの情報しか得られない。これは広大な肝臓の全体像を必ずしも反映していないことを意味する。この点、非侵襲的に複数箇所から反復して評価可能である肝硬度測定の特長は大きい。肝内の線維・脂肪沈着の heterogeneity と予後・肝発癌との関連性についての新たな知見の発見につながることが期待される。